歌語「にほどり」と「にほのうみ」をめぐって

――和歌史的視点から――

渡辺輝道

一

「にほどり」（かいつぶり）は、上代から平安朝末までのわが国の文学作品においては、宇津保物語の二例（後述）を除いては、総て和歌中において用例を見るだけであるから、歌語といって支障はない。初例は『古事記』に見る。[注(1)]

いざ吾君（あぎ）　振熊が　痛手負はずは　にほどり（邇本杼理）の
淡海（あふみ）の湖（うみ）に　潜（かづ）きせなわ（中巻　仲哀紀）

忍熊王が皇位を狙っての近江国での最後の戦に敗れて、伊佐比宿祢と共に琵琶湖に入水する時の歌である。この「にほどり」を「潜き」の枕詞とみる考えに対して、日本古典文学大系校注者は「比喩と解すべき」とするが、ともにその生態としての「かづき」に結び付けて「にほどり」を捉えている点で本質的に同底である。歌の前後に「にほどり」がこゝで詠まれる必然を記述するところがないから、「かづき」することゝの関連から「にほどり」が用いられたか、「淡海の湖」との結びつきからそれが用いられた（矚目の景であった可能性もある）かという二点において、その用法は考えられるが、確定する根拠は以下の諸例からの帰納によらねばならない。ただ、「にほどり」の語彙史においては、その二面がそれぞれにかゝわってくる用例を見ることになるという意味で、この初例は注目されるのである。

『万葉集』では七例を見る。[注(2)]

(1)にほ鳥の潜く池水心あらば君に我が恋ふる心示さね
（四―七二五、大伴坂上郎女）

(2)…にほ鳥の二人並び居語らひし心そむきて家離りいます
（五―七九四　山上憶良）

(3)思ひにし余りにしかばにほ鳥のなづさひ来しを人見けむかも

（一一一二四九二　作者不詳）

(4)にほ鳥の葛飾早稲をにへすともそのかなしきを外に立てめやも

（一四一三三八六　東歌）

(5)…朝なぎに舟出をせむと舟人も水手も声呼びにほ鳥のなづさひ行けば家島は雲居に見えぬ…

（一五一三六二七　作者不詳）

(6)…寄るべなみ左夫流その児に紐の緒のいつがりあひてにほ鳥の二人並び居奈具の海の奥を深めて…

（一八一四一〇六　大伴家持）

(7)にほ鳥の息長川は絶えぬとも君に語らむ言尽きめやも

（二〇一四四五八　馬史国人）

(1)は、水に潜って小魚を捕る習性から「潜く（かづく）」を、(7)は同じ習性から「息長（おきなが）」を、(4)は、(1)の用法の延長として同音の「カヅ」を導く枕詞として用いられている。(1)歌は、内に秘めた恋心を水に潜っているにほ鳥の姿に託している点で単なる枕詞というより、比喩用法と認める方が適当であろうが、(4)のように「カヅ」を導く枕詞用法を生み出している事実からして、既に「にほ鳥の」が「潜く」の枕詞として用いられる状況はあったと考えられる。(3)(5)は、その水上に遊泳する生態から「なづさふ」に、(2)(6)は、繁殖期の雌雄の様子から、「二人並び居」にかゝる枕詞として機能している。

万葉集の七例はいずれも、瞩目の景物としての「にほ鳥」の描写といえる例はないが、身近に棲息する「にほ鳥」の生態の観察から生み出され、だれにも実感的イメージがあった枕詞としての用法であるところに、万葉らしさが指摘できる諸例であるといえよう。

因みに、「にほ鳥」は、『新撰字鏡』『和名抄』共に、「鸊鷉」に「爾保（邇保）」の和名を付し、和名抄では「今俗呼加以都牟利。…野鳧小而好没水中也。…玉篇云、鸊鷉其膏可以塗刀劒。」といった解説を加える。

漢代から唐代にかけての「鸊鷉」を詠む詩を検索しても十首に満たない数を見出すのみである。その中で叙景の景物として「鸊鷉」が詠まれている例。

煙深苔巷唱樵児　花落寒軽倦客帰
藤岸竹洲相掩映　満池春雨鸊鷉飛

（杜牧　朱坡絶句）

その他として

…截海取蒲類。跑泉飲鸊鷉。…

（李益　再赴渭北使府留別）

…日晩鸊鷉泉畔猟。路人遙識郅都鷹。

（李商隠　贈別前蔚州契苾使君）

右の例は塞外、西受降城の近くにあった「鸊鷉泉」（和名風にいえば「にほの泉」）を詠んだもの、引用は省くが杜甫詩に見える「鸊鷉」は、和名抄の解説にあったその膏で刀剣を磨くというもので、中国詩の諸例からは、和歌における「にほ鳥」の描写と直接に重なるところは指摘できない。「にほ鳥」が、「潜く」「なづさふ」「息

長」「二人並び居」るというのは、まさに古代人が「にほ鳥」を身近に観察するところから生み出された表現であり、「にほ鳥」は純粋の歌語ということができる。

二

平安時代に入ってからの「にほ鳥」は、八代集では、古今集に一例、後撰集に三例、拾遺集に一例を見出すが、後拾遺集以後その用例を見なくなる。

題しらず　　躬恒

冬の池にすむにほ鳥のつれもなくそこにかよふと人にしらすな

（古今　恋　六六二）

題しらず　　宮道高風

春の池の玉もにあそぶにほ鳥のあしのいとなきこひもするかな

（後撰　春　七二）

題しらず　　よみ人しらず

冬の池にすむにほ鳥のつれもなく下にかよはん人にしらすな

（後撰　冬　五〇二）

女三のみこに　　敦慶親王

うきしづみふちせにさはぐにほ鳥のそこものどかにあらじとぞ思ふ

（後撰　恋　一〇二七）

三百六十首の中に　　曽祢好忠

にほ鳥のこほりのせきにとぢられて玉ものやどをかれやしぬらん

（拾遺　雑秋　二四五）

古今六六二番歌と後撰五〇二番歌は同歌とみられるが、前者は撰者の躬恒の歌として登録されていることから、古今時代に既によみ人しらず歌として伝えられていた後者の歌を、躬恒が改作して自作として載せたという前後関係が推測される。躬恒は「池―澄む―底」の縁語表現を意識して、「下」を「そこ」に改めたのだろう。

さて、万葉集歌では「にほ鳥」は修飾語を持つことなく、その生態である「潜く」「なづさふ」「息長」「二人並び居」を導く枕詞として用いられていたのであったが、右の三代集の用例は、好忠歌を除いて、「冬の池にすむ」「春の池の玉もにあそぶ」「うきしづみふちせにさはぐ」という修飾語が冠せられ、「――にほ鳥の」までが序詞を構成するという用法に変化していることが注目される。万葉集の枕詞で古今集にも引き継がれたものの中に、枕詞の本質である社会性、固着性が薄い個性的、一回性傾向をもつ枕詞が多いという指摘がなされている。[注(3)] このことは言い換えれば、枕詞が序詞的用法に変質して行っているということで、「にほ鳥の」もその現象の一例に組み入れることができる。右の四例中三例が「春の」「冬の」と季節を指定しているのは、古今集において特に重視されるようになった四季歌の意識が、留鳥で特に季性を持たない景物である「にほ鳥」を用いる際に、そのイメージを明確化するためにも心要とされた表現であったと考えられる。そして、そのことが枕詞の基

本条件である五音を破壊し、「にほ鳥の」を枕詞から序詞に変質させることになった。こうして枕詞である限り持たねばならない固着性から脱皮して、「―にほ鳥の」は、「つれもなくそこ（下）にかよふ」「あしのいとなき」「そこ」といった被修飾語を自由に導くことが可能になるようになったのである。もっとも右の被修飾語はいづれも、万葉集例での被修飾語であった「潜く」という生態を基底にしたバリエーションであるということはできる。と言ってしまうと、万葉集例で見られた「潜く」ともう一つの被修飾語であった「二人並び居」が見られなくなったということになるが、古今六六二、後撰五〇二番歌の「つれもなく」は「二人並び居ではない」ことを示すもので、この二首は、万葉集での「二人並び居」と「潜く」の二つの被修飾語を重ねて、それぞれを変奏させた「つれもなくそこ（下）にかよふ」を序詞の被修飾語としたという万葉の表現の継承と脱皮の工夫をそこに認める必要があろう。[注(4)]

古今、後撰集の四首は、万葉集での枕詞的用法を序詞用法に転換させて、恋ゆえの行動や恋心の乱れを比喩する、歌語「にほ鳥」の新しい表現への展開を示すものとして注目されるのであるが、拾遺集の好忠歌は、恋歌のとりなしとしての「にほ鳥」を、歌の主材として捉え直したところにさらなる新味がある。この歌、後撰集七二番歌の「春の池の玉もにあそぶにほ鳥」をヒントにして作られた可能性も考えられる。後撰歌の場合、「玉もにあそぶ」は池中に藻のあるところで、遊泳したり潜ったりしているにほ鳥をいうのであろうが、好忠歌は「鳰の浮巣」と後に言われる玉藻で水上に作った巣、そこから遠く離れて水上に浮いている――その理由を「氷の関にとぢられて」と推測――にほ鳥の景を詠んだものか。好忠歌の叙景歌にしばしば見られる観念的構図がこゝにも指摘できるが、古事記、万葉集から拾遺集までの「にほ鳥」歌を通覧して来て、この拾遺集の好忠歌においてはじめて、歌の主題として扱われた「にほ鳥」の姿を見ることになるのである。

好忠が万葉集から多くの語彙を採取し、[注(5)]新しい叙景歌の世界を開拓して十世紀後半の歌界に異彩を放ったことは数多く指摘されている。拾遺集の好忠歌が万葉語としての「にほ鳥」を意識して作られたものか、古今、後撰集歌を踏まえてのものかは明確にしがたいが、歌語「にほ鳥」がそれ以後も歌材として継承されていく可能性を指し示した点で評価されてしかるべき作であった。この歌『金葉集』初奏本にも重出し、好忠と同じく万葉語を採用したり、実験作歌的活動をして「年老いて後、いよいよこの道に傍に人なしと思ひて、心の泉のわくにまかせて、風情のよりくるに随ひて、おぢずはばからず、言ひ続け」（『顕註密勘』）たと評された源俊頼からも評価されたのであったが、「にほ鳥」歌は、この好忠歌を最後として、後拾遺集以下の五つの勅撰和歌集に取り上げられることはなかった。

三

拾遺集に次のような事実がある。拾遺集編纂以前に藤原公任によって編まれた拾遺抄に次の歌が採用されている。

題不知　　読人不知

よをさむみねざめてきけばにほ鳥のうらやましくもみなるなるかな　　（冬　一四四）

これまで見て来た「にほ鳥」歌が「潜く」をはじめとする習性を核にしたイメージの枠内で歌材としていた――好忠歌もこの点では「玉もにあそぶ」イメージの延長にあるといえる――のに対して、この歌は、その枠外に出たものといえる。厳寒の真夜中、池に遊ぶ水音を聞きとめての詠か、その鳴き声によってか。こゝでその鳥を「にほ鳥」と決める手がかりは、鳴き声による以外にはない。

この歌、拾遺集においては、

よをさむみねざめてきけばをし鳥のうらやましくもみなるなるかな　　（冬　二二六）

と「にほ鳥」は「をし鳥」に改変されて入れられている。

「にほ鳥」は既に見てきたように、万葉集では特に季性は与えられていなかったが、古今、後撰集において、冬、春という季節が冠せられるようになり、拾遺集の一例は「氷のせきにとぢられ」て、巣にももどれない「にほ鳥」という厳冬のイメージが添えられたのであった。したがって、寒さのために夜中に寝ざめ、その寒さに「身馴れ」て何の苦もない鳥の気配を耳にするというのであれば、その鳥が「にほ鳥」であっても差し障りはないはずである。それを敢えて「をし鳥」に置き変える理由は、別に考えられねばならない。

拾遺集では「をし鳥」は、

夜をさむみねざめてきけばをしぞなく払ひもあへず霜やおくらん　　（冬　二二八　よみ人しらず）

とびかよふをしのはかぜのさむければ池の氷ぞさえまさりける　　（冬　二三二　紀友則）

右の二例がある（他に一例あるが戯れ歌といえるもので参考にならない）。さらに、古今、後撰集の例を見ると、

池にすむ名ををし鳥の水をあさみかくるとすれどあらはれにけり　　（古今　恋　六七二　よみ人しらず）

夜をさむみねざめてきけばをしぞなく払ひもあへず霜やおくらん　　（後撰　冬　四七八　よみ人しらず）

かくれぬにすむをしどりのこゑたえずなけどかひなきものにぞありける　　（後撰　恋　七七五　右大臣）

ゆふさればねにゆくをしのひとりしてつまごひすなる声のかなしさ　　（後撰　哀傷　一四〇〇　閑院左大臣）

古今、後撰集の四例のうち三例は、恋歌素材としての「をし鳥」の例――後撰一四〇〇番歌は「あひしりて侍りける女のみまかりにけるを、こひ侍りけるあひだに、夜ふけてをしのなき侍りければ」の詞書をもつ――といえる。ただ一例の四季歌である後撰四七八番歌を、拾遺集は重出しているのである。

拾遺集二二六と二二八とを較べてみると、「夜をさむみねざめてきけば」と初二句が同じであり、二二八は「をしぞなく」と鳴き声を聞いていることを明示している。さらに、後撰七七五番歌は「をしどりのこゑたえずなけど」、一四〇〇番歌は「つまどひすなる声」と「をし鳥」の鳴く様を描写している。これまで見てきた「にほ鳥」歌は、その鳴き声が詠歌対象になることはなかった。それに比して、「をし鳥」はその鳴き声が詠歌対象の主になっているのである。「ねざめてきく」は、庭の池の水音でもありうるし、事実として「にほ鳥」も、鳥類図鑑等の解説によれば、キュキュ又はピッピッと鳴くのであるから、その鳴き声でもありうるのだが、二鳥のそれぞれの詠歌伝統に基づけば、「をし鳥」の鳴き声を「ねざめてきく」の対象とすることの方が自然だとして、拾遺集では「をし鳥」と改変したものであろう。詠歌伝統に鋭敏であった拾遺抄の撰者藤原公任が、「にほ鳥」として採用したのは、歌材「にほ鳥」に新しい視点を加えるものとして評価したものであろうか。

拾遺抄の一四四番に続く一四五番に、

水鳥のしたやすからぬ思ひにはあたりの水もこほらざりけり

（読人不知）

がある。この歌このまゝ拾遺集、冬二二七に採入されているが、『古今和歌六帖』第三の「にほ」に、

にほ鳥のしたやすからぬ思ひにはあたりの水もこほらざりけり

（一四九七）

とあって、原歌は「にほ鳥」であった可能性が濃い。「水鳥」に「した」にかゝる用法が特に指摘できないのに対し、「にほ鳥」には「した」にかゝる用法（後撰集五〇二番）があった。

古今六帖と拾遺抄との資料関係が明確でないので、公任の資料としたものがもともと「水鳥」であった可能性もあるので、これ以上の推論は避けるが、これまで述べてきたことから、拾遺集で「にほ鳥」歌は、三首登録される可能性があったことが指摘できる。そして、拾遺抄から拾遺集へと移って行く段階で、結局は「にほ鳥」歌は一首となったのである。そして以後、勅撰集においては新勅撰集までその姿を現わすことがない。

拾遺集時代、歌語の新旧の出入りが激しかったことは、いろ〳〵に指摘されているが、[注(6)] 拾遺集での「にほ鳥」歌の示す事実は、「にほ鳥」が旧歌語であったということだけで説明のつくものであるのかどうか、いま少し考察を進めていきたい。

四

八代集においては「にほ鳥」は拾遺集を限りとして姿を消したのであったが、こゝで物語歌や私家集での用例を見ておく。物語の中で「にほ鳥」が扱われるのは、『宇津保物語』が最初である。

(1)又かくて、夕暮れに雨ふりたるころ、中島に水のたまりに、にほとりといふとりこゝろすごくなきたるをきゝ給て、侍従、あ

て宮の御方におはして、かくきこえ給ふ

池水に玉藻しづむはにほどりの思ひあまれる涙なりけり

（藤原の君）

(2)君だちの御前なれば、人〳〵心づかひして、ものゝ音などかき鳴らしつゝ、あくるほどに、にほどりのほのかに鳴くを、藤侍従きゝて、さうの琴にかくかき鳴らす。

われのみと思ひしものをにほどりのひとり浮かびてねをもなくかな

とあるかなきかに、かき鳴らす。あて宮きんの御琴に、

にほどりのつねにうかべる心にはねをだに高くなかずもあらなむ

（祭の使）

(3)真砂君の恋しくおぼえ給ふをり〳〵なむ、

きくだにもゆゝしき道とおもひしを君もゆきぬと見るがかなしさ

袖君

ならびゐてあそびしものをにほどりの涙の池にひとりゆくかな

（菊の宴）

右の(1)(2)に、管見に入った地の文中の「にほ鳥」の二例がある。(1)において、作品中ではじめて「にほ鳥」を地の文中で用いる時、「にほといふとり」と記述するのは、「…といふ」が、読み手に馴染みのないものを紹介する場合の常套句であることから、「にほ鳥」が一般に馴染まれていない鳥であるかの感を持たせるが、前後の叙述にみるように、邸中の池に飛来して、すだくことがあることから考えても、馴染みのない鳥であることを示すというよりも、歌語としてのみ用いられる「にほ鳥」を散文中に用いることへの違和感がそうさせた表現というべきであろうか。(1)(2)では、「にほ鳥」は、これまでの和歌諸例には見られなかった「鳴く」ことが描写され、詠まれ、(3)の「ならびゐて」歌は、平安朝和歌では直接表現されることなかった、万葉的な「二人並び居」を表現している点が注目される（袖君は、亡くなった真砂君と姉弟である）。それぞれの記述の前後から考えて、(1)は、春の花ざかりの時季のこと、(2)は、六月の納涼の行事の続きの事柄であり、(3)は、本文に錯簡が指摘されるところで、[注(7)]時季は確定できないが、宇津保物語の語り手は、「にほ鳥」の周年性と瞩目の生態をふまえて、その時季、描写にこだわるところがなかったといえようか。

『源氏物語』では、歌の中の一例のみである。

その駒もすさめぬ草と名にたてるみぎはのあやめ今日や引きつる

と詠みかけた花散里の歌に対する源氏の返歌に、

にほどりに影を並ぶる若ごまはいつかあやめにひき別るべき

（蛍）

「にほどりに影を並ぶる」は、夫婦仲のよいにほ鳥と影を並べるの意で、あの「にほ鳥の二人並び居」とする表現を基にしたものである。物語背景は五月五日の節句であり、「にほ鳥」が描写されると

ころがないから、沼池に生える「あやめ」からの連想として「にほ鳥」が用いられたものであろう。しかし、ここで注目されるのは、それまでの諸例がすべて「にほどりの」であったのに対して、ここでは「にほどりに」と表現されていることである。「にほ鳥」を単なる修飾として持ち込んできているのではなく、「にほ鳥」歌がそれまでに培ってきたイメージを全的に抱えこんで、「にほ鳥」を一つの世界をもった歌語として、歌の中に位置させていると考えることができる。伝統を踏まえながらもそこからさらなる世界を切り拓いていこうとする作者紫式部の発想の深さを窺わせる一例でもある。このことは後に触れる「にほのうみ」にもかゝわっていくところのものである。

物語でのいま一例は『狭衣物語』に見える。

水あさみかくれもはてぬにほ鳥の下にかよひし跡も見しかば

権大納言が、かつて狭衣が忍んで一品宮に通っていた時に、そのことを見たという実績をもとに、折しも狭衣に届いた女からの文を、隠しても無駄だと強要するところ。この歌、古今六六三や後撰五〇二番を踏まえて、全体としては比喩歌である。

次に私撰集、私家集における「にほ鳥」歌を見る。

『古今和歌六帖』第三に、「みづとり」「をし」「かも」に続いて「にほ」歌が九首まとめられている。その中、既に述べた一四九七、一四九九（万葉四四五八）、一五〇四（後撰七二）、それに、ここに紛れこんでいる一四九八の「かも」歌を除いて示すと、

にほどりのおなじうきねをするときはよぶかきこゑをともにこそきけ　（一五〇〇）

君がなもわが名もたてじ池にすむにほといふ鳥のしたにかよはん　（一五〇一）

あふことのなぎさによするにほ鳥のうきにしづみてものをこそ思へ　（一五〇二）

にほどりのすだく池水心あらばきみにわがこひこゝろしめさね　（一五〇三）

ひとりのみみつの堀江にすむにほのそこはたえずもこひわたるかな　（一五〇五）

一五〇〇は「夜深き声」を扱っている点が注目されるが、「うき寝」は一人寝ゆえであり、一五〇五は「ひとり…すむにほ」と表現するところから、この二首は「にほ鳥の二人並び居」を下敷きにしているといえるが、「二人並び居」を積極的にいうことはない。一五〇一は「したにかよふ」、一五〇二は「うき、しずみ」、一五〇五は「そこ」と、「にほ鳥のかづく」ことを踏まえての表現で、一五〇三は、万葉集七二五番と同歌であろうが、肝心の「かづく」が「すだく」に誤られて、このまゝでは「にほ鳥」を詠み込む意味がなくなる。もっとも、意図的な改変であるとみれば評価は違ってくるが。

私家集においては、次の諸例を見る。

おほやけよりぜにふたつたまへるを

にほどりのかよふ水だにあさきせにうかべるかもはふたつゝら

ねて　　（壬生忠見）

氷

にほどりのしたこぐ波もたゝぬかな池のこほりやあつくなるらむ　　（藤原長能）

にほどりのしたの心はいかなれやみなるる水のうへぞつれなき　　（和泉式部）

百首歌中に、かきつばたを

にほどりのすだく水沼のかきつばたひとへたつべきわが心かな　　（源俊頼）

月前水鳥

にほどりのかづくにわれぬうす氷ありあけの月のやどるなりけり　　（覚性法親王）

長能、覚性の叙景素材としての「にほ鳥」の扱い、俊頼の「にほどりのすだく」に新味がある。十二世紀の歌人である俊頼、覚性を例外として、私家集でも「にほ鳥」を採用する歌人は、拾遺集時代の歌人までであったといえよう。

これまで見てきた平安時代に入っての「にほ鳥」歌の諸例をまとめると、それらが圧倒的に恋歌であったことが指摘できる。そして、それらにおける「にほ鳥」の用法は、万葉集時代までの、その生態から生まれた「かづく」「二人並び居」の二つの側面を引き出す「にほ鳥」の枕詞用法のうち、「かづく」は、表現としては多様化しても、積極的に採用されたが、「二人並び居」は、「ひとり」とか「つれ（も）なし」という裏返しの表現によって継承されたということができよう。しかし、それも拾遺集時代でもって終焉を迎えるのである。

古今集が恋歌を、恋の展開に沿って配列するという実験に成功して、以降の勅撰集はいずれもその方法を継承するのだが、その恋歌のほとんどは、片想いの懊悩と失恋の悲嘆を歌うものであって、恋の成就の喜びを歌うものはほとんどないのが、平安朝恋歌の特徴であった。心の中に想いを秘める（潜く）段階で、また、恋に破れて「ひとり」をかみしめる時に、「にほ鳥」は使えても、「二人並び居」の幸せを真正面から詠む発想は、勅撰集の恋歌にはないのである。その意味で、物語中の数少い「にほ鳥」歌であっても、そこに「二人並び居」が発想されていることは興味深い。和歌集がその美学によって、恋の喜びを切り捨てても成立しうるのに対して、物語は、その段階を飛び越えて成立しうるものではないからである。また、物語歌で鳴く「にほ鳥」が素材とされていたことも示唆的である。和歌世界では、ほとんどその鳴く姿を想像させなかった「にほ鳥」が、物語では、鳴き声を聞かせたのである。和歌が伝統的な共通イメージを尊重し、その枠内から発想されることを作法とするのに対し、全方位的に対象を把捉する物語では、おのずから、和歌世界がいつのまにか忘れ去った対象の諸側面を掬い取ることになる。そんな中で生まれる物語歌が、純粋に和歌として発想され形象された歌とは違った様相を示すのは当然だといえばいいうる。いわゆる

和歌と物語歌との位相については、こゝで発展させる余裕はないので、別の機会にゆずりたい。

いずれにしても、物語歌においても、私撰集、私家集においても、拾遺集時代に「にほ鳥」歌は姿を消すのである。

五

万葉集に見られる鳥類は三〇種が数えられる。[注(8)] その中で八代集にわたって生き続けた鳥――五集以上に詠まれた鳥は十一種である。その中に、「にほ鳥」と同じ水鳥で、その歌語としての成立展開に類似性をもつ「をし鳥」がいる。その初例は『日本書紀』に見る。

山川にをし二つゐてたぐひよくたぐへる妹をたれか率にけむ

（孝徳紀　野中川原史満）

日本古典文学大系の頭注は、この歌が詩経、周南の詩句

関関雎鳩、在河之洲、窈窕淑女君子好逑。

からの翻案によるものと指摘しているが、「をし鳥」の「二つゐてたぐひよ」き姿は、わが国においても、特に雄が繁殖期に華麗に変羽して、雌と番を組んで池沼に浮かぶ姿として実感的に捉えていたはずのものであった。しかし、万葉集に見る四例は、

人漕がずあらくも著し潜きするをしとたかべと舟の上に住む

（巻三―二五八）

妹に恋ひ寝ねぬ朝明にをしどりのこゆかく渡る妹が使ひか

（巻一一―二四九一）

磯の裏に常夜日来住むをしどりの惜しきあが身は君がまにまに

（巻二〇―四五〇五）

をしの住む君がこの山斎けふ見ればあしびの花も咲きにけるかも

（巻二〇―四五一一）

であって、「をし鳥」の「二つゐてたぐふ」姿は歌われないのである。わずかに二四九一歌が、その「をし鳥」の生態を契機として歌われているかといえるだけなのである。万葉集での「をし鳥」は、日本書紀歌のイメージを継承することなく、特定のイメージを形成するところまでにも成長せず、「にほ鳥」よりも影の薄い存在であったという他はない。中国詩では、詩経以後も詩材としてしばしば取り上げられる。漢語「鴛鴦」がその雄と雌とをそれぞれ表すということからも、当然のことではあるが、「鴛鴦」は番の姿で中国詩に現われる。平安朝文学に深い影響を与えた『白氏文集』にも、

……鴛鴦蕩漾双双翅。楊柳交加万万條。……

（正月三日閑行）

……蟋蟀啼相応。鴛鴦宿不孤。……

（南塘暝興）

といった例を見るし、後引する『文華秀麗集』中の朝野鹿取の詩に、日本古典文学大系頭注は、類句として蕩子従軍賦の、

…池前怯対鴛鴦伴。庭際羞看桃李蹊。

を指摘している。このような中国詩の影響を受けて、日本漢詩に

も、次のような例を見る。

…池前恨看鴛比翼。梁上慙対燕双栖。…

（文華秀麗集　朝野鹿取　「奉和春閨怨」）

…還嗟未狎鴛鴦帳。先負漢家妖艶名。

（文華秀麗集　小野年永　「奉和観新燕」）

いずれも鴛鴦の仲睦まじい番のイメージを素材としている。こう見てくると、「をし鳥」の雄雌番のイメージは、詩材「鴛鴦」を通して持ち込まれたと考えるのが正解であろう。『和名抄』は「鴛鴦　和名乎之。雌雄未嘗離。人得其一、則一思而死、故名匹鳥也。」と、雌雄の相離れぬ情の深さ示す故事まで紹介している。『枕草子』で「水鳥、をしいとあはれなり。かたみにゐかはりて、羽の上の霜はらふらんほどなど。」というのも、こうした詩材としての鴛鴦の権威を背景にしての立言と考えられる。漢詩文の影響が多く指摘される『源氏物語』でも、和歌の一例だけでなく、

水鳥どものつがひをはなれず遊びつゝ、細き枝どもをくひて飛びちがふをしの波のあやに文をまじへたるなど、ものゝ絵やうに書きとらまほしき…　（胡蝶）

といった地の文中の「をし鳥」の描字が三例見られる。

古今集から拾遺集までの「をし鳥」歌は、三章で既に引用したが、その中で「雌雄不相離」姿にかかわるのは、

かくれぬにすむをしどりのこゑたえずなけどかひなきものにぞありける　（後撰　恋　七七五）

夕されば　ねにゆくをしのひとりして　つまごひすなるこゑのかなしさ　（後撰　哀傷　一四〇〇）

夜をさむみ　ねざめてきけばをしぞなく　払ひもあへず霜やおくらん　（拾遺　冬　二二八）

で、いずれも相離れたゆえの悲しみを歌う。これは「にほ鳥」歌で「二人並び居」のイメージが裏返されて「つれもなし」「ひとり」と詠まれたのと同じ発想である。

しかし、「にほ鳥」歌が拾遺集時代を限りとして、平安朝和歌史から消えていったのに対し、「をし鳥」歌は、以下の勅撰集に途絶えることなく詠み続けられる。

このごろの夜半のねざめは思ひやるいかなるをしか霜はらはん　（後拾遺　雑　八八九　小大君）

池にすむわが名ををしのとりかへすものともがなや人をうらみじ　（金葉　恋　三九一　藤原惟規）

いまさらにおのがすみかをたゝじとてこの葉のしたにをしぞなくなる　（詞花　冬　一四五　惟宗隆頼）

かたみにや上毛の霜をはらふらむともねのをしのもろ声になく　（千載　冬　四二九　源親房）

ひとりぬるわれにて知りぬ池水につがはぬをしの思ふ心を　（千載　恋　七八七　大納言公実）

はかなしやさてもいく夜か行く水にかずかきわぶるをしのひとりね　（新古今　冬　五六〇　藤原雅経）

特に「をし鳥」歌を七首入集させている千載集からは二首を挙げたが、「をし鳥」のひとり寝、上毛の霜、鳴き声といった素材、そして、「名を惜し」と「をし」とを掛ける掛詞用法等々、様々な側面で「をし鳥」は詠まれ、題詠歌が激増する十一世紀以降は、冬歌の景物として、叙景歌の中に描写される。その中で、千載集四二九番歌は、和歌史の中では、番の「をし鳥」を詠んだ歌として異彩を放つ。

歌語として「にほ鳥」と類似した成立と展開をもつ「をし鳥」が「にほ鳥」とちがって、このように和歌史上に歌い継がれていったことの理由として、①「にほ鳥」のように万葉集時代に枕詞化しなかったこと、そのため平安時代に入って、旧い歌語のイメージを持つ枕詞が衰退していったのと運命を共にする可能性が薄かった。②有力な漢詩文素材であるという権威的背景があった。そのことが平安朝後期和歌に少なからぬ影響を与えた『枕草子』や『源氏物語』にも取り上げられる要因となり、「をし鳥」の歌語としての位置を一層強固にした。③留鳥ではあるが夏は山間部に棲んで、秋、冬期に里に降りてくるという渡り鳥的季性が、四季歌を重視するようになった平安朝和歌の素材として適合した。④秋季に変羽して華麗な形姿になり、雌雄番の姿を見せるその生態が、貴族的嗜好に迎え入れられた。⑤その名称「をし」が「惜し」との掛詞として用いることが可能であったため、和歌素材として表現の可能性に幅があった。といったことが指摘できようかと思う。そして、それらの理由の各項の対極に歌材としての「にほ」鳥があったといえよう。万葉集からの脱皮を鮮明に見せはじめる後拾遺集時代[注(9)]から「にほ鳥」がその姿を消していったのは、一つの必然であった。

六

しかし、「にほ鳥」は簡単に和歌史から抹殺されることはなかった。『源氏物語』の早蕨の巻で、薫が詠んだ歌に、和歌史にはじめて登録された歌語があった。

しなてるやにほのみづうみにこぐ舟のまほならねどもあひ見しものを

物語の前後に、序詞中ではあっても「にほのみづうみ」が詠まれる必然的文脈はない。『河海抄』はこの歌について、

しなてるやにほの水海にこぐ船のまほにもいもにあひみてしかな

という万葉集の人丸歌によったものという。

そして、

先達説にいはく、万葉歌とりすぐす強非難云々。

とまで言っているが、右の歌、人丸歌としてはもちろん、万葉集中に見出せない。先例が指摘できない以上、源氏物語の創出といわざるをえないが、源氏物語の創出した地名呼称というものが他にないことを思えば、『河海抄』がその出典を強引にでも付会しようと

したことも強ち否定できない思いが残る。『大日本地名辞書』は、和名抄に「野洲郡邇保郷」という地名が記載されていることから、

今按に是は鳥名より出でて郷名と為り、又後世「鳰鳥淡海」の語に本づき、鳰海てふ名を定めたるならん。

と仮説を述べる。右の「鳰鳥の淡海」は、一章に引用した『古事記』の歌の語句を指すのであろう。現在確認できる資料として「にほの海」の出典となるものは、これ以外にない。

源氏物語を初例とするこの「にほの海」は、まず物語歌に採用される。

別れにしわがふる里のにほの海にかげを並べし人ぞこひしき
（浜松中納言物語）

にほの海のあまもかづきはせぬものをみるめよせける風の吹くらん
（浜松中納言物語）

にほの海やしほひにあらぬかひなさはみるめかづかむかたのなきかな
（夜の寝覚）

これらが、少女時代に『源氏物語』を耽読したことを告白している孝標女がその作者に擬せられている二つの物語に見られるものであることは興味深い。最初の一首は薫の歌と前に引用した源氏の「にほ鳥」歌とを合成したものといえるもの。また、後の二首が「にほの海―かづく―みるめ」と主素材を共通した、発想の類似した歌であることも注目される。

和歌史に「にほの海」が現われるのは、『千載集』からである。

わが袖のなみだやにほの海ならんかりにも人をみるめなければ
（恋　八五五　上西門院兵衛）

『新古今集』にも一首、

にほの海や月のひかりのうつろへば波の花にも秋は見えけり
（秋　三八九　藤原家隆）

二つの勅撰集にはそれぞれ一首しか採集されないが、家隆の壬二集には右の歌以外に五首、後鳥羽院集には七首、定家の拾遺愚草には（員外も含めて）八首と、新古今時代の重要歌人が重要な新歌枕として詠作に取り入れたことがわかる。

千載集の撰者藤原俊成が、六百番歌合での判詞で「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」と発言したのは、あまりにも有名であるが、当代の歌壇の指導者のこの発言は、以後の和歌史と源氏物語との深い関係を生む契機となった宣言であった。俊成の源氏物語評価の経緯とその内質については、寺本直彦氏に詳細な論考があるのでそれに譲りたいが、氏は「源氏物語には、少なくとも「艶」「あはれ」「優」「やさし」等の美が見出され」「これらの美意識は、すなわち俊成の歌論、歌風の根本をなすもの」であったと言われる。かくして、源氏物語はその精神から美学、さらに語句表現に至るまで、俊成の薫陶を受けた新古今時代歌人、さらにそれを受け継ぐ後世の歌人たちに吸収され、和歌詠作に応用されていくのである。[注(1)]

「にほの海」歌が千載集、新古今集に採集されるのは当然であった。そしてそのことが、長い間忘れられていた「にほ鳥」を歌語と

して復活させる契機ともなったのである。それは定家が撰集した『新勅撰集』からであるが、

ふみみけるにほのあとさへをしきかな氷のうへにふれる白雪　（冬　四二七　康資王母）

にほどりのなきながら川はたえぬとも君にかたらふことつきめや　（恋　九三八　よみ人しらず）

は

以下、続古今集、続拾遺集、新後撰集…と「にほ鳥」歌は、和歌史に生き続けるのである。新勅撰集の九三八番歌は、末尾の「やも」が「やは」となっているが、万葉集四四五八番の再録である。長い間水に潜ったままであった歌語「にほ鳥」がやっと水面に再び姿を現わした、その「息長」ぶりと付合するかのような「にほ鳥」歌である。

「にほ鳥」は、平安朝和歌史の内実を端的に物語る歌語であった。

注(1)『古事記』応神紀に「…みほどり（美本杼理）の潜き息づき…」の一例がある。「みほどり」は「にほどり」と同じと考えられる。

注(2)万葉集の番号は旧国歌大観番号、訓みは日本古典文学全集による。これによれば四四三番の「牛留鳥」を「ニホドリ」と訓む説を出しているが、新編国歌大観等は、別訓を示しているので、ここでは四四三番歌を用例に入れなかった。

注(3)島田良二「古今集の枕詞」（「茨城大学人文学部紀要」第三号）

注(4)新日本古典文学大系『古今和歌集』は、六六二の注で「冬の池にすむにほ鳥の」を「つれもなく」の序詞とし、同じく『後撰和歌集』では五〇二の注で「下にかよはん」にかゝる序詞としている。前者は（万葉集用法の）「二人並び居」を採り、後者は「潜く」を重視したための齟齬といえる。

注(5)滝沢貞夫「曽祢好忠試論」（「言語と文芸」59）

注(6)後藤祥子「源氏物語の和歌」（『源氏物語と和歌　研究と資料Ⅱ』武蔵野書院）

注(7)日本古典文学大系本では、この前後を「嵯峨院」巻に入れている。

注(8)近藤信義「万葉集と動植物」（萬葉集講座　第二巻）

注(9)拙稿「名所歌枕から見た後拾遺集」（高知大国文　第十一号）

注(10)奥村恒哉『歌枕』（平凡社選書）

注(11)『源氏物語受容史論考』（風間書房）第一章

本論中の引用本文は、日本書紀・古事記・文華秀麗集――日本古典文学大系、万葉集――日本古典文学全集、古今集～新勅撰集・古今和歌六帖――新編国歌大観　勅撰集編・私撰集編、私家集関係――私家集大成中古Ⅰ・Ⅱ、宇津保物語――本文と索引宇津保物語の本文篇、和名抄――諸本集成倭名類聚抄本文篇（臨川書店）、

源氏物語――源氏物語大成、河海抄――紫明抄河海抄（玉上琢弥編　角川書店）、狭衣物語・浜松中納言物語・夜の寝覚――日本古典文学大系　によった。引用に当たって表記は私に改めたところがある。

（本学教授）

会員近著紹介

『高知県文学散歩』　岡林清水著

高知にかかわる文学について、古代から現代に至るまでを語れる人は、著者以外にない。その意味では待望久しい作品である。著者には既に「高知県文学史」（昭和三九年刊）の著がある。そこでは通史的な視点で高知の文学が語られたのに対して、今回は高知県の各地域とそこにかかわる文学という、空間的視点での記述になっている。「史」と「散歩」との相違である。内容は、

一、甲浦・室戸路　二、土佐日記の旅
三、高知市とその近郊　四、土讃線とその周辺
五、土佐くろしお鉄道に乗りて　六、椿の岬への旅

となっていて、高知県を東から西へと通覧していく構成になっており、そこに紀貫之の行路と江藤新平の土佐路の逃亡行程とを経緯に織り込むという企みがされている。随所に著者ならではの作品解釈もあって、気楽にも深くも読める作品である。高知の文学を知るための必携の書である。

一九九一年三月三十一日　発行　B6版　二七六頁　一七一八円　高知市文化振興事業団刊

『新美南吉「ごん狐」研究』　北吉郎著

今や小学校国語教材の古典となった、新美南吉の「ごん狐」、A5版印刷で八頁ほどの小品に対して、著者はその五〇倍にも及ぶ研究をまとめた。

第一部　「ごん狐」の誕生　第二部　「ごん狐」の作品世界
第三部　「ごん狐」と国語教育

の三部構成で、「ごん狐」のテーマとして一般にいわれる「つぐない」論に対して「求愛」を読み取るべきだという新説を提出している。その論拠とするのは、この作品の成立の背景にあった南吉の「求愛、悲哀、絶望」体験であり、それが〈擬獣化〉されて「ごん狐」は成立したという。

第三部では、著者の「ごん狐」解釈が、小学生の読みとして通用するかを、実践授業報告としてまとめられている。「ごん狐」研究に一石を投じた書であり、現場の教員がこの成果にどう反応するかも興味がある。

一九九一年五月十五日　発行　A5版　三九四頁　三八八四円　教育出版センター